

Title	<紹介>斎藤理生著『太宰治の小説の〈笑い〉』
Author(s)	川那邊, 依奈
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 154-155
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/70920">https://hdl.handle.net/11094/70920</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 齋藤理生著『太宰治の小説の〈笑い〉』

川那邊 依奈

本書は、齋藤理生氏が、二〇〇三年度に本学に提出された博士論文「太宰治作品の〈笑い〉」を下敷きに、新たに執筆された論文を加えたものである。

齋藤氏は、従来の論考では「道化」「戯画化」として、あくまで表層的なものとなされてきた〈笑い〉を、小説全体のしくみを読み解く重要な手掛かりとして捉え、個々の作品の精緻な分析、検討を通して、太宰の小説の新たな面に光を当てている。本書は、第一部「方法としての〈笑い〉」と、第二部「視座としての〈笑い〉」の二部構成である。

第一部「方法としての〈笑い〉」では、七つの論を集めている。ここでは、太宰が初めて「ユーモア作家」としての才能を評価された『畜犬談』を筆頭に、これまで〈笑い〉の要素が指摘されながらも、部分的な言及にとどまってきた作品を取り上げ、〈笑い〉の働きに注目しつつ、個々の小説を分析している。具体的に見ていくと、「〈笑い〉と深刻―『畜犬談』論」では、語りの構造に着目することで、犬ぎらいの「私」による過剰な語りや、「家内」による相対化といった〈笑い〉を醸し出す効果が、一篇に不可欠な要素であることを明らかにしている。「太宰治の『ドン・キホーテ』―『デカダン抗議』『恥』論」では、『デカダン抗議』と

『恥』が、〈誤読〉による〈物語〉の生成と挫折という、セルバンテス「ドン・キホーテ」と通底するモチーフを有していることを指摘し、『デカダン抗議』と『恥』における〈笑い〉のしくみを解き明かしている。「豹変する者たち―『破産』論」では、中心人物である万屋の二代目の言動を語り手がどのように位置付けているか検討し、嫁や周囲の人々との相似性を指摘している。また、嫁の罵詈雑言や、『徒然草』を破って羽織紐にした初代の行動など、読者の〈笑い〉を誘う言動は、実は隠れた意味を持ち、作品に奥行きを与えていることを示している。「本音の露呈―『吉野山』論」では、『吉野山』の語りが、失言や矛盾によって、直接的には語られていない内容を暗示するしなげを持ち、典拠である西鶴作品の筋や設定だけでなく、滑稽な語りの構造をも摂取していることを明らかにしている。「ぶつけあう言葉―『浦島さん』論」では、「私」の語りや、浦島と亀の会話を精細に分析している。言葉のいらぬユートピアである竜宮に身を置いて、自分が言葉から逃れたいことに気付いた浦島と同じく、語り手もまた、時に〈笑い〉を誘うほどに言葉にこだわり、読者とのコミュニケーションを実現しようと努めていることが分かる。「諷刺の手法―『男女同権』論」では、老詩人による講演と、戦後社会に流布していた「民主主義踊り」の言説との類似性に焦点を当て、『男女同権』を、「民主主義の黎明」に浮かれて語る人々を諷刺した作品として捉えている。「田島周二の遁走―『グッド・バイ』論」では、その題名によって、太宰の死による中断という文脈が

強調されてきた『グッド・バイ』を、作者からいったん距離を置いて分析している。当初の目的を忘れて「色気」と「欲気」で行動してしまう主人公を相対化し、読者を〈笑い〉へと誘う語りの効果や、物語の舞台である一九四八年の新宿の闇市の実態について述べている。

第二部「視座としての〈笑い〉」では、六つの論を集めている。ここでは、従来〈笑い〉から程遠い読み方をされることが多かった作品を取り上げ、それらひとつひとつに〈笑い〉に繋がる表現構造があることを指摘し、その構造を手掛かりに新たな読みを提示している。具体的に見ていくと、「宙づりの「ロマンチズム」——『八十八夜』論」では、これまで独立した作品として読み解かれることが少なかった『八十八夜』の構成と語りの構造を分析し、ロマンチズム対リアリズムといった単純な二項対立が、〈笑い〉によって相対化されていることを示している。「虚と実のあいだ——『春の盗賊』論」では、物語の本筋との関わりが分かりづらいためとすれば枝葉末節に見られがちな叙述に着目し、虚構と事実との間をめまぐるしく往来する「私」の語りと、それに応じた読者の視座の転換が〈笑い〉を誘う、『春の盗賊』の表現構造について考察している。「組みあわせる言葉——『女の決闘』論」では、鷗外の翻訳小説『女の決闘』からの引用と、「私(DAZAD)」の「説明」と「空想」という錯綜した言説の関係を検討し、『女の決闘』が、性質の異なる言説を組み合わせることで、読みが変容する効果を巧みに活かした小説であったことを明らかにしている。

「強敵としての太宰治——『親友交歓』論」では、『親友交歓』を例に、一見、親しげに読者に語りかけてくるような太宰の小説が、実は複雑な構造を持ち、入り組んだ小説の創作主体としての太宰の一面を窺わせることを論じている。「すれちがう〈奉仕〉——『眉山』論」では、読者に〈奉仕〉する小説家が、それを理解してくれない読者の一人である「トシちゃん」に、自分もまた〈奉仕〉されていたことに気付くという「すれちがいの構造」を明示し、さらに、〈奉仕〉というキーワードから、太宰の他作品との関連にも言及している。「大庭葉蔵の饒舌——『人間失格』論」では、これまで見過ごされてきた細部の言葉づかいを検討し、手記の書き手としての大庭葉蔵が、一貫性をもつ〈自画像〉を構築しようとする努力ながら、そうした一貫性への固執が、かえって手記が内包する齟齬を浮かび上がらせていることを指摘している。その点に留意して読めば、書き手としての葉蔵は、いささか滑稽な存在でもあり、『人間失格』の細部には、中心となる物語を覆しかねない効果をもつ表現がみちていることが分かる。

いずれの論考も創見に富み、太宰の小説の〈笑い〉が、きわめて戦略的に導入された方法であることが窺える。近代文学に限らず、文学作品における〈笑い〉の機能を考える上で、本書は、貴重な視座を提示していると言えよう。

（双文社出版、二〇一三年五月、二八〇頁、四、四一〇円）

（かわなべ・よrina 本学大学院博士前期課程）